

九州の誇りの博物館

太宰府天満宮宮司
西高辻信良



太宰府には二つの顔があるとよくいわれます。それは、一つは大宰府政庁。今から一三〇〇年以上前にこの地にできた国の出先機関であり、九州九か国(豊前・対馬の経済、政治を治め、また外国との対外交渉、さらに防衛の役目を果たした役所がありました。その権師、副長官として京都で無実の罪を被って左遷された菅原道真公。その道真公を祀る太宰府天満宮。

この大宰府政庁と太宰府天満宮が太宰府を代表する二つの顔だといわれています。そして去年、平成一七年に我が国で第四番目の国立博物館、九州国立博物館が太宰府の地に誕生しました。太宰府天満宮の境内の杜を抜けエスカレーターと動く歩道でつながった九州国立博物館。まさしく、トンネルを抜けるとその先に二一世紀初の世界的規模の国立博物館が威風堂々たる姿で建っています。九州国立

博物館は開館一年を待たずして、入館者二〇〇万人を突破しました。それほど、地元や他の地域では人気を集めております。一一〇〇年の歴史をもつ太宰府天満宮。そして今スタートしたばかりの国立博物館。トンネルを経て隣合わせのこの二つの機関がともに相乗効果で人の注目を集め、栄えていくことがもちろん望まれます。

九州国立博物館の特色の一つに地元待望の博物館という位置づけがあります。住民が昭和四〇年代から九州国立博物館の誕生を待ち、誘致運動に力を入れました。しかし歴史をひもとくと、実は一〇〇年以上前の明治二六年からこの構想はあるわけです。この誘致の結果、開館したということは、これは一つの地元の財産です。地元の人々にとつて九州国立博物館は、まったく他の地域からきた異邦人とい

う考え方ではなくて、むしろ自分たちの願いから生まれた博物館という非常に親近感をもったスタンスがそこにはあります。

ですから住民との接点を最大限生かして、住民と共生する、すなわち住民をいろんなかたちで博物館の運営、あるいは博物館のイベントに引き寄せるといったことが必要ではないかと思えます。まずそのためには、いくつかのやらなければいけないものがあります。親しまれる博物館であると同時に、地域住民の誇りとなる博物館を目指す必要があります。親しまれる博物館のまずいちばん大きなポイントは、わかりやすい展示。そして、博物館を訪れた人々が知識の満腹感を感じて帰れるという、そういうことが必要ではないでしょうか。

そのためには博物館では展示の内容をテーマにした「講座」があつたり「ミュージアムトーク」があつたり、地元をはじめ

いろんな人たちがボランティアとなつて行う「ガイドツアー」あるいは「バックヤードツアー」、そういったものが必要でしょうし、図録の作成やカタログ、目録の作成などもわかりやすい展示の一助だと思えます。あるいは「シアター」では文化財をわかりやすく解説、そのための映写室も必要になつてくると思えます。当然「ミュージアムライブラリー」もそれを利用する入館者にとつては、非常にありがたい施設となります。

また博物館は単に展示物を見るだけではなくて、ゆとりの時間を与えてくれる、提供してくれる場所でもあるべきだと思います。そのためには、博物館の敷地の中においしいレストランがあるというのも必要となつてくるのではないのでしょうか。あるいは、博物館での「ミュージアムコンサート」あるいはさまざまな「ショー」もできる限り博物館の話題づくりには必要なことではないかと思えます。

ボランティアは今後の高齢化社会を迎える我が国では国民の生涯学習を考えるうえではいちばん必要なことだと思えます。住民との緊密なる接点を取る意味に



地元待望の九州国立博物館がついにオープン

おいてもボランティアは必要です。そのボランティアで博物館を訪れた地元の住民がさらにまた別の人を博物館に呼ぶ連鎖的な連携が必要ではないでしょうか。今は社会をリタイアして、あと残り三分の一の人生があるという時代です。そういう近未来に博物館にかかわってボランティアができるということは、これは幸せなことだと思えます。そういうことが、ひい

ては身近な博物館につながつてくるのではないのでしょうか。

それから学校教育との連携も大切な問題です。我が国の博物館や美術館の場合、どうしても統計上若い世代、一〇代・二〇代・三〇代の世代の人々がなかなか入館していません。今いちばん入館が多いといわれているのが六〇代、それも女性といわれています。これはやはり少年期・青年期に博物館教育・美術館教育がされていない、あるいは教育の中に博物館・美術館がかかわっていないということがいえるような気がします。

九州国立博物館は、文化交流という大きなテーマを掲げております。この太宰府は、古くは中国大陸から時計回りに入ってくる文化と反時計回りに入ってくる文化がちょうど九州の太宰府で合流し、そして東に奈良や京都や江戸のほうに流れていったという大事な場所です。この館が文化交流をテーマにしたということには非常にすてきなことだと思います。九州国立博物館が、いつも住民とともにあり、そして地域住民、ひいては九州の誇りとなることを願つてやみません。